HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	越野, 剛
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7041号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70607
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Go_Koshino_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　越野　剛

学位論文題名

ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史

・本論文の観点と方法

本論文は文学作品を題材とした文化史研究、文化史の観点を導入した文学研究という二つの側面を持つ。ドストエフスキー自身は癲癇を持病とし、また彼の創作には病気や病人のモチーフが数多く見られる。これまで先行研究は作家の言動や作品のテクストを通じて病気の実態を突き止めようとする病跡学的なアプローチが支配的であり、精神分析的な研究の多くもその延長線上に位置づけられる。ここでの文化史的な方法とはいわゆる言語論的転回をふまえたアプローチを念頭においており、テクストに記述された病気が実際には何であったかではなく、病気がどのように想像されイメージが構築されていったかに焦点をあてる。

文化史研究においてドストエフスキー（あるいはプーシキン）のような卓越した作家のテクストだけでは必ずしも同時代の文化における典型的なイメージとは重ならない。そのため同時代の他の作家、通俗的・大衆的な文学作品、ジャーナリズム、医学、フォークロアなどの資料と比較対照することにより、ドストエフスキーのテクストを位置づける作業が必要である。こうした観点に立ってドストエフスキーの創作を再検討し、同時代に広く共有されていた病気のイメージや概念との偏差やずれを測ることにより、ドストエフスキー研究においてこれまで議論されてきた癲癇だけでなく、結核やコレラなどの多様な病気のイメージが作品において果たしている機能を分析することができる。こうした分析はドストエフスキーの創作手法や文学的特長の解明につながるものとなる。

・本論文の内容

第１章では『白痴』を主に取り上げてそこに現れる結核のイメージについて考察する。「肺病 чахотка」という古い名称は「結核 туберклез」に比べて文学的な含意が感じられる。早すぎる死を運命づけられた薄幸の美女や才能ある若者というロマン主義的なイメージはロシアにおいても広く受容された。とりわけアレクサンドル・デュマ・フィ

スの『椿姫』(1848 年)およびジュゼッペ・ヴェルディによるオペラ版『椿姫(トラヴィアータ)』(1853 年)は肺病やみの娼婦というステレオタイプを流通させた。ドストエフスキーの『白痴』のナスターシャは身体的には健康でありながら椿姫のイメージが意図的に重ねられている。一方で肺病による死を宣告された若者イッポリートはそのロマン主義的な悲劇の身振りが期待された効果を得られず、常に滑稽な役割を演じる羽目に陥る。このように病気に関するステレオタイプがパロディ的に借用されるようなケースはジェイムス・ライスのいう「反省」的なレトリックの一種として考えることができる。

第 2 章では催眠術(メスメリズム)を取り上げる。例えば明確な目的地もなくペテルブルグを彷徨い歩くラスコーリニコフのように、ドストエフスキーの登場人物はしばしば覚醒と夢見の狭間にあるような不安定な意識をさらけだす。これは作家自身が癲癇発作の後に体験したという記憶の混乱や朦朧感覚とも共通する。催眠術の原型となったのは 18 世紀末のフランスで流行したメスメリズムとされる。ドストエフスキーはバルザックやオドエフスキーといったロマン主義期の文学作品を通じてだけでなく、ドイツロマン派の影響の強い医学・哲学の文献からもメスメリズムの知識を得ていた。第 1 節ではそのロシア文化における受容を概観し、第 2 節では初期短編『主婦』と後期長編『白痴』を中心にドストエフスキー作品における催眠術のモチーフを分析する。心霊術やオカルティズムとの接点が多いメスメリズムは、第 1 章で論じた結核のイメージと同じように、ロマン主義のパロディとして皮肉な距離をおいて描かれることが多い。一方で本人が自覚していない隠された欲望や潜在意識が催眠術的な語彙を用いて表現されており、不条理でありながらリアリティのあるドストエフスキー特有の迷宮のような人間の心理描写を可能にしている。

第 3 章では癲癇発作と類似した病理現象として悪魔憑きあるいはヒステリーを取り上げる。農村女性に多くみられた悪魔憑き(クリクーシャ)についてはウォロベツの社会史・文化史的な研究があり、本章の関心とも重なっている 。ここでは真にデモーニッシュな現象、何らかの利益を得るために演じられた詐病、過酷な環境におかれた女性の病理現象(癲癇あるいはヒステリー)というクリクーシャについての三つの解釈を区分し、17 世紀から 19 世紀までの通時的な時系列と農民・貴族・知識人という共時的な社会層の二つの断面に沿って異なる解釈が現れることを明らかにした。イスラムの預言者ムハンマドについても、キリスト教圏においてはその奇跡や神秘体験が詐欺師の芝居だとする意見が支配的だったが、19 世紀に入ってからはムハンマドが癲癇患者だという説明が説得力を帯びる。病跡学・医学的な解釈はイスラムやキリスト教という差異を超えて宗教指導者の比較を可能にした。真の宗教に対する偽の宗教(詐欺師)といった

価値判断は後景に退くことになる。ドストエフスキーにとってこれらの問題は悪霊に憑かれた男がイエスによって癒されるという聖書に由来する信仰治療の物語と重なるがゆえに関心を抱かざるをえなかった。

第 4 章では 19 世紀になって初めて世界史に登場するコレラを扱う。死をもたらす伝染病としてのコレラはしばしば無神論や社会主義などの「伝染性」のある思想のメタファーとなった 。革命によってヨーロッパが震撼させられた 1830-31 年や 1848 年がコレラの流行と重なったこともイメージの重複をうながした。第 1 節と 2 節ではプーシキンの時代を中心にして文学やフォークロアにおけるコレラと民衆の暴力のイメージの複雑な重なり合いを解き明かす。第 3 節はドストエフスキーの『悪霊』論になっている。小説で描かれるコレラは言葉や思想が人間に影響を及ぼすことの意味を掘り下げる役割を果たしている。ステパン氏の「疑似コレラ холерина」がシュピングリン工場の「コレラ暴動」と対比されることによって、1840 年代のペトラシェフスキーと 1860 年代のネチャーエフの世代の革命思想の連続性と断絶が俎上に載せられる。ドストエフスキー自身が 40 年代末に経験した政治的な病気とも関連付けられる。

第 5 章ではドストエフスキーの創作において謎めいたかたちで癲癇の描写に関与している火事のモチーフを取り上げる。『悪霊』のクライマックスで描かれるように火事もまた革命のメタファーではあるが、伝染病のように専ら否定的なイメージを担うだけではなく、ユートピアに向けて旧世界を浄化する炎として肯定的な意味合いでも用いられてきた。放火は弱者である民衆あるいは女性が反逆のために依拠する手段ともみなされる。急激な近代化と人口統計の進展によりドストエフスキーの時代にはロシア全土で火事が増えているというイメージが構築されていた。ドストエフスキーの作品ではこうした様々なイメージが人が火事を目の前にしたときに覚える病的興奮や癲癇発作後の朦朧状態（自動症）で行われる放火といった病理現象と重ね合わされている。

結核、コレラ、メスメリズムなど病気に関する言説やイメージの多くは西欧文化に由来するものである。結論では、ドストエフスキーのテクストにおいてそれらが「対話性（受容と反発）」というドストエフスキー文学の特長やロシア文化全体の文脈に結びついていることを示した。